# 銭形平次捕物控

## 血潮と糠

野村胡堂

青空文庫

# 一

「親分、面白い話がありますぜ」

ガラツ八の八五郎、錢形平次親分の家へ呶鳴り込みました。

「相變らず騒々しいな、横町の萬年娘が、駈落したつて話なら知つて居るよ」

錢形の平次は、戀女房のお靜に顔を當らせ乍ら、滿身に秋の陽を浴びて、うつら〳〵とやつて居るところだつたのです。

「ヘツ、そんなつまらない話ぢやねえ。——ところでお靜さん、——いや姐御つて言ふんだつけ——、親分の顔を剃るのはよいが、右から左からいゝ男つ振りを眺めてばかり居ちや、剃り上げないうちに、後から〳〵生揃つて來ますぜ、ヘツヘツヘツ」

「まア、何んといふ口の惡い八五郎さんだらう」

お靜は眞つ赤になつて俯向きました。赤い手柄、赤い襷、白い二の腕を覗かせて、剃刀の扱ひやうも思ひの外器用さうです。

「八、からかつちやいけねえ。さうでなくてせえ、危つかしくて、冷々して居るんだ」

「まア」

とお靜。

「先刻も、止せばいゝのに自分で襟を剃つて、少し剃刀を滑らしたんだ」

「自分の粗相にしても、姐御の頸筋へ傷を付けるのは虐たらしいねえ」

「その血染の剃刀で俺の髭を當つて居るんだから、一つ間違つて手が滑ると夫婦心中だ、ハツハツ、ハツ」

平次はそんな氣樂なことを言つてカラカラと笑つて居ります。

「まア」

お靜は又赧くなりました。

「だがね、親分、仲のいゝ夫婦だからいゝやうなものゝ、他人同士ぢや血と血が刃物の上で交るのは縁起が悪いと言ひますぜ」

「そんな事を擔ぐ人もあるだらうよ。第一血染の剃刀で當られちや氣味が良くないやネ、——ところで八、手前が觸れ込んで來た面白い話つてえのは何だい」

平次は職業意識に返りました。剃つた後で顔を洗つて、綺麗に拭き取ると、煙管を伸ばして、縁側の日向へ煙草盆を引寄せます。

「あツ、忘れてゐた」

ガラツ八は自分の掌でピシリと頬を叩きました。人間は少し甘いが、不思議にいゝ耳を持つたガラツ八は、平次に取つては申分のない見る目嗅ぐ鼻だつたのです。

「忘れるやうぢや、どうせ大した話ぢやあるまい」

と平次。

「ところが大變なんで、野垂れ死をした若い物貰ひが、百兩持つて居たんだから驚くでせう。自慢ぢやないがこちとらは、人樣の袖に縋つたおぼえはないが、どうかすると百文も持つて居ねえことがある」

「自分に引くらべる奴があるかい、——だが、筋は面白さうだね、もう少し詳しく話してみるがいゝ」

平次も少し乘出しました。

「たつたそれつきりの話さ、種も仕掛もねえところがこの話の取得

で」

「種も仕掛もねえことがあるものか、貰ひ溜めたにしても百兩は大金だ。五年や十年で溜まるわけがねえ、——今お前、若い物貰ひと言つたらう」

「なあ——る、恐れ入つたね、さすがに錢形の親分だ。若い乞食が百兩溜めるわけはねえとは理窟だね」

「感心して居ちやいけねえ、その百兩は小粒か、小判か、それとも證文か」

「それが小判なんで、封も切らずに二十五兩包が四つ、外に貰ひ溜めらしい錢が二三百ありましたぜ」

「何？　小判で百兩？　それが種も仕掛もない話かえ。大泥棒が仇討ぢやあるまいし、お菰が小判で百兩持つて居るわけがあるもんか」

「成程さう言へばその通りだ、——親分も知つて居なさるでせう、觀音様の裏に居る編笠乞食」

「ウム」

「業病に取つ付かれて、人に顏をさらさないが、物貰ひにしちや色の白い、何となく身體に品のある若いのが居ましたらう」

「それが死んだのかい」

「道端に坐つて、朝から晩までお經を讀んで居たのが、何か食ひ物でも惡かつたか、今日の晝頃のた打ち廻つて死んで了つたさうです。誰も構ひ手がねえから、まだ菰をかけてありますよ——先刻町役人立ち合ひで調べて見ると、胴卷から二十五兩包が四つ飛出しやがつた。百兩も持つてる癖に、何だつてまた物貰ひの眞似をしやがるんでせう、罰の當つた野郎ぢやありませんか」

「そいつは曰くがありさうだ、もう一度行つて見る氣はないか」

「行きますとも、親分と一緒なら」

ガラツ八は飛上がりました。最上等の獵犬のやうに、鼻さへもヒクヒクさせて居ります。

## 二

神田から淺草へ、近い道ではありませんが、悠長な時代で、平次が行き着くまで、行倒れの死骸はまだ取捨てる段取にもならず、町内の番太が、迷惑さうな顏をしながら、寄つて來る彌次馬を追つ拂つて居りました。

「これは錢形の親分、——高が物貰ひの行倒れで、御手に掛けるやうな代物ぢや御座いませんよ」

「どうせさうだらうが、商賣冥利にちよいと見て行かう——小判で百兩も持つて居たつていふぢやないか」

「ヘエ——、大層溜めやがつたもので、番太で駄菓子を賣るよりは、餘つ程歩がいゝと見えますよ、ヘツヘツヘツ、——金は町内の旦那が預つてありますが、何なら——」

「いやそれには及ばない、小判は物貰ひの懷から出ても小判に間違ひあるまい」

平次はさう言ひ乍ら、往來の人の疎になつたところを狙つて、ヒヨイと菰を捲り上げました。

中には古綿をつくねたやうな、見る影もない乞食の死骸——と思ふと大違ひ、苦悶に歪んで、妙に怪奇な身體の恰好になつて居りますが、年の頃二十五六の、何となく美男といふ感じのする男の死體です。

それに、病氣のせゐもあつたでせうが、乞食にしては色も白く、業病々々といつても、ところどころ無氣味な斑紋はありますが、それも大したこともなく、見た感じは、それほど醜くもなつて居りません。

唯平次が驚いたのは、死骸は素人の眼にも異常で、毒死の跡がはつきり判ることだつたのです。平次も日頃『檢屍辨疑』位は讀んで居りますが、その中の毒死の幾項かは、この死骸にはつきり現れて居るやうな氣がするのです。

「醫者に立ち合つて貰つたかい、爺さん」

「いえ、それどころぢやありません、旦那方は秋祭りの支度で眼が廻る騒ぎで――」

番太の親爺は心得たことを言ひます。

「八、檢屍のやり直しといふわけにも行くまいが、町役人にさう言つて、念の爲町内の本道を連れて來てくれ。道端の物貰ひに毒を飲ませて、懐中の百兩を盗らずに行くなんかは、少しをかしいよ」

「よし來たツ、町役人が文句を言つたら八丁堀まで飛んで行つて、笹野の旦那に江戸一番といふ醫者を連れて來て貰はうか」

「馬鹿だなア、八丁堀まで行つちや日が暮れるぢやないか、丁寧に頼むんだぞ」

「心得てるよ、親分」

ガラツ八は横つ飛びにスツ飛んで行きましたが、何う話をつけたものか、間もなく町役人と坊主頭の醫者を一人、手を引張るやうにして連れて來たものです。

醫者は屍體の眼を見、唇を見、爪を見、それから全身を調べて、藥箱から取出した銀の簪、それを何やら藥液に浸して屍體の口に入れ、暫らくして取出して、水で洗つて、

「フーム」

と眺めて居ります。

「毒は何でせう」

「其處までは判らないが、毒を飲まされて死んだ事に間違ひはない、この通り」

醫者の差出した銀簪を見ると、成程その先が青黒く色變りがして居ります。

「死んだ後で口の中へ毒を入れたのぢやありませんね」

「そんな事はない。爪の色、眼瞼の中がまるで違ふ」

「有難う、飛んだ手數をかけました」

平次は丁寧に醫者を送り返しました。

「親分、大變なことになつたね」

ガラツ八は妙な行掛りに、すつかり面喰つて居ります。

「八、この男の身許を洗つてくれ、生れ乍らの物貰ひぢやあるめえ」

「そんな事なら譯はありません」

ガラツ八は足を宙に飛んで行きます。

## 三

「親分、大縮尻さ。こんなヒドい目に逢つたことはねえ」

ガラツ八が歸つて來たのは、それから一刻ばかり經つた時分、四方はすつかり暗くなつて乞食の死骸も取片附けて了つてからでした。

「解らないのか」

番太の小屋でガラツ八の歸りを待つて居た平次、幸先が悪いと見

たか、やをら立上がつて、煙草入を腰に落します。

「小屋頭を尋ねて、編笠乞食の身許を訊いたが、何うしても言はねえ。堅氣の方が身を落したのは仲間の定法で元の名前は申上げられません。どうせ、かうなつた身體だから、そんな事は何うでもいゝぢや御座いませんか。それに、あの編笠野郎は、餘程深い仔細があると見えて、自分からも言ひません——とかう吐しあがる」

「フム」

「その代り遺骸は此方で引取り、回向萬端手落なく致させます——てやがる。お貰ひの仲間にも、坊主も穴掘りも居るんだつてネ、親分」

「そんな事は何うでもいゝ、が、變死人と解つても、身許が解らなきア、何にもならない」

「ところが、親分、面白い話を聞込みましたぜ」

ガラツ八は、例のキナ臭いやうな鼻をしました。これは何か嗅ぎ出した時の表情です。

「何だ、八、物惜みをせずに、言つて了ひな」

平次も少し不機嫌です。

「あの編笠乞食のところへ、毎日一度づつ様子を見に來る娘があるんだつてネ」

「何？　誰がそんな事を言つた」

「筋向うの駄菓子屋の婆アがさう言つて居ましたよ。初めのうちは氣が付かなかつたが、近頃は毎日食べ物を持つて來てやるから、ツイ顏を見る氣になりましたつて、——とんだ綺麗な娘だつて言ひますよ」

ガラツ八は到頭大變な事を嗅ぎ出して來ました。

尤も、こんな騷ぎが始まると、大抵の人は掛り合ひを恐れて、知つてる事も默つて了ふのが人情ですが、ガラツ八の調子が開けつ放しで、人間が如何にも邪念がなささうなので、相手になつ居ると、うつかり舌を滑らして了ふのでせう。それがガラツ八の取得で、錢形平次に重寶がられて居る原因でもあつたのです。

氣さくな平次は、直ぐ駄菓子屋へ飛んで行きました。反つくり返つた箱の中から、駄菓子を二三十文選り出させて、觀音詣りの土産物といつた體裁に包ませ乍ら、

「お婆さん、編笠乞食のところへ來る娘さんは、ありや何だらうねえ、大層な容貌だつて評判だが——」

「親分はよく御存じで、町内にもあの娘の事を知つて居るのは、さうたんとはありませんよ」

駄菓子屋の婆さんの舌は、思ひの外滑らかにほぐれます。商賣冥利、お客への世辭のつもりだつたかもわかりません。

「幾つ位に見えるだらう」

「十九そこ〳〵、丁度にはなりませんねえ」

「身分は何だらう。男には眼の届かないところがあるものだ、お前さんが見たら判るだらう」

「それがね、親分、側へ寄つて見たわけでも、聲を掛けたわけでもありませんから、判然したことは申上げられませんが、着物の好み、髮形などから見ると、下町の大店のお嬢さんといふところぢや御座いませんか」

「成程、——ところで、編笠乞食との間柄は何だらう。兄妹とか、許嫁とか、話ぶりで見當は付かなかつたらうか」

「それがネ、親分、こんなに離れて居ちや、聞かうと思つても聞え

やしません。裏の井戸端に居る嫁の話聲はよく聞えるんですが――」

姑根性――と言ふものでせう、ガラツ八は危ふく吹出すところでした。

「今日も何か食ひ物を持つて來た樣子かい」

「ヘエ、竹の皮包にして、お壽もじか何か持つて來た樣子です。お晝少し前でしたよ」

「確かにそれを食つたらうね」

「娘さんの後姿を伏し拜むやうにして喰べてましたよ」

「で、その後で苦しみ始めたんだね」

「お鮨を喰べて小半刻も經ちましたかしら、暫らくはそれでも我慢して居る樣子でしたが、到底たまらなくなつたと見えて、地べたを這ひ廻るやうにして苦しみ出しました。見ちや居られませんでしたよ」

「有難う、それだけわかりや、大助かりだ」

平次はホツとした心持になつたのでせう、思はず岡つ引の地を出して、こんな事を言つて了ひました。

## 四

「八、今日は大事な仕事だ。縮尻るやうな事があつちや、取り返しが付かない」

「親分脅かしつこなしに願ひますよ、一體どんな野郎と噛み合やいゝんで――？」

「喧嘩ぢやないよ、あの娘の後を跟けて、何處へ納まるか見屆けれアいゝんだ」

「ヘエ――」

ガラツ八は眼を見張りました。よくも斯う目が屆いたものです、花川戸の方から入つて來た娘、町一杯に見通す位置に身を潛めて、路地の口から、此方を眺めて居るのを平次は指して居るのです。

事件の翌る日、變死した乞食の身許を洗ひやうがないと解ると、平次は最後の手段として、馬道に朝から張り通して今日も來るかも知れない娘を待つたのでした。

「――身に覺えがなきア來るに決つて居る。覺えがあつても、下手人は後の樣子を見たがるから、きつと來る――」

そんな事を言つて、半日路地に立つた平次とガラツ八は、晝少し前漸く酬いられて、目差す娘が白日の下に現れたのを見付けたのでした。

「綺麗だね、親分、あれを跟けるのは朝飯前だが、あんなに綺麗ぢや跟ける方で氣がさす」

「何をつまらない、――それ、諦めて歸つて行くだらう。覺られちや打ちこはしだ、そつと跟けて行け」

「合點、これも役得さ。同じ跟けるなら、綺麗な新造の方がどんなに心持がいゝか判らない」

八五郎は驅け出しました、が、思ひ直した樣子で立止ると、裾を七三に端折つて、手拭でヒヨイと顏を包んだものです。ポカポカする秋日和、頬冠りは少し鬱陶しいが、場所柄だけに、少し遲い朝歸りと思へば大して可笑しくはありません。

「錢形の」

不意に平次の肩を叩いた者があります。

「あ、三輪の親分」

振り返ると、ニヤリニヤリと四十男が、平次の顏と、驅けて行くガラツ八の後姿を半々に眺めて居ります。

三輪の萬七といふ顏のいゝ御用聞、石原の利助が隱居してからは、錢形の平次を向うに廻して、事毎に手柄を爭つて居る男だつたのです。

「大層な手柄だつてネ、行倒の乞食の懷から小判で百兩出たといふ話には驚かないが、その行倒れを毒死と睨んだ平次親分の目には恐れ入つたよ、——此處は馬道だから、筋を言や俺の繩張りだが、そんなケチな事は言はねえ、まア、折角やんなさるがいゝ。あの乞食が大名の落し胤だつたりした日にや、大變な事になるぜ、ハツハツハツ」

萬七はもう一つ若い平次の肩をポンと叩くと、言ひたいだけの事を言つてクルリと、踵を返しました。

「——」

平次は眉を顰めましたが、妙に萬七の樣子に自信があるので、うつかりした事が言へません。

それから半刻ばかりすると、ガラツ八は埃と汗に塗れて飛んで來ました。

「親分ツ」

「何といふざまだ」

「口惜しいよ」

「口惜しいよ」

「口惜しくたつて、泣く奴があるものか、大の男が——、娘を見失つたらう」

平次に圖星を指されたのでせう。

「見失つたんぢやねえ。娘の後を跟けて、淺草御門を出るといきなり横合から飛出した野郎が、ドカンと突き當るんだ」

「尻餅をついたらう」

「尻に泥が着いて居るから、そんな事を言ひ當てたところで自慢にならねえ、——ね、親分、その突當つた野郎は、あつしが起上がると胸倉を掴んで、ポカポカツと來やがるぢやないか」

一克者のガラツ八は、すつかり腹を立てゝ、親分の平次にまで食つてかゝりさうです。

「それが何うした、八、落着いて物をいへ、大事なところだ」

「その野郎を誰だと思ひなさるんだ。親分、三輪の萬七の子分、お神樂の清吉だらうぢやないか。——手前の親分の平次は、三輪の繩張を荒して、事毎に恥をかゝせやがる。今度といふ今度は、その敵を討つてやるから、覺えて居ろつてやがる」

「何だと八、敵を討つ？」

「清吉の野郎は確かにさういひましたよ、親分、身に覺えがありますかえ」

「馬鹿、敵の覺えなんかあつてたまるものか、——それから娘は何うした」

「そんなに揉んで居るんだもの、女の足だつて請合ひ箱根の關を越す」

「つまらない事をいふな、到頭縮尻りやがつたらう」

「だつて親分」

「三輪の子分なんかに掛合つて居るから惡いんだ。そんな時はな、八、後學の爲に言つて置くが、毆られ損にして逃げ出すんだ」

「——」

「見ろ、埃と汗と涙で、臺無しぢやないか。往來の人が見て笑つて

居るぜ」

「――」

「よくその扮装で、淺草橋御門から駈けて來たものだ。そつちを向きな」

口小言を言ひ乍らも、平次の眼も泣いて居りました。汚れ傷ついて來た飼犬でもいたはるやうに八五郎の身體をクルリと廻して、せめてもの埃を叩いてやつて居ります。

「親分、あつしは口惜しい」

「何をつまらねえ、――三輪の親分が、神田か日本橋で、何か嗅ぎ出したんだらう、――ところで、八、此處から淺草橋まで行くうち、娘は後ろを振り向いて見なかつたか」

「後ろを振り向くどころか、横顏も見せねえ。お重詰らしい風呂敷を持つて眞つ直ぐに行きましたよ、あんまり後姿が綺麗だから、何遍か前へ駈け拔けて顏を拜まうとしたが――」

「馬鹿、そんな心掛だから、お神樂の清吉に毆られるんぢやないか」

「親分、何とか敵を討つておくんなさい。あのお神樂の野郎、あつしの鼻へ指を突つ込みあがつて、勘辨ならねえ野郎だ」

「ウ、フ、お前の鼻を見ると、指位突つ込みたくなるだらうよ。踵でなくて仕合せだ、まア、勘辨してやれ」

「ね、親分、せめてあの娘の家だけでも判りア」

「その位のことならわけはないよ。三輪の萬七親分か、お神樂の清吉の後を跟けて居りア、日の暮れるまでにはきつと判る」

「有難てえ、それぢや親分」

ガラツ八は又飛出しました。

## 五

娘の素姓は直ぐ判りました。

横山町の米屋――といつても、金貸しの方で名高い萬兩分限、越後屋佐兵衞の跡取娘お絹、辨天とも小町とも、いろ〳〵の綽名で呼ばれる、界隈切つての美人だつたのです。

編笠乞食の素姓も、それにつれて次第にはつきりしました。

越後屋の手代彌三郎と言つて、二十五。主人の佐兵衞が、今から二十五年前、觀音樣へ朝詣りをした時、雷門の側に捨てゝあつたのを拾つて、そのまゝ自分の子とも、奉公人ともなく育てたのでした。

佐兵衞夫婦は丁度生れたばかりの總領を喪くして、悲歎にくれて居る時だつたので、そのまゝ總領の乳母を留め置いて彌三郎を育てました。間もなく、姪のお絹を貰つて、跡取娘といふことにしたのです。

二人は負けず劣らず美しく可愛らしく育ちました。彌三郎は素姓も判らぬ拾ひ子ですが、維盛樣のやうな美男、お絹とは似合ひの夫婦雛を見るやうで、主人の佐兵衞も妙に許したやうな眼で見、二人の間柄も、淡い友愛から、次第に濃い戀へと變つて行くのが、店の人達の眼にも、はつきり判るのでした。

其處へ主人の遠緣に當る、新助といふのが割り込んで來ました。年は二十七、散々他の店で苦勞して商賣にも賢く、人柄がまことに實直で、二三年の間に、すつかり彌三郎の占めて居た地位を奪ひ、緣續きの關係があるにしても、今では番頭の茂助、支配人の民五郎に次いで、店にはなくてならぬ人になつて來たのです。

茂助は四十年も勤め上げた商賣一點張の老人、支配人の民五郎は、佐兵衞の弟で、これは一と癖も二た癖もある人間、若い時は隨分放埒な暮しもしたやうですが、今ではすつかり堅くなつて、兄の佐兵衞を助けて、家業大事に勵んで居ります。

彌三郎は、妙に自分の不安定な地位を考へさせられる頃から、肉體の上にも、恐ろしい變化と崩壞が始まつて居たのです。

出入りの醫者に診て貰つて、それは、當時では癒りやうのない業病と知つた時の、彌三郎の驚きはどれ程だつたでせう。醫者の口から漏れるともなく、この事が家中に知れ渡ると、彌三郎はもう居ても立つても居られない心持になつて居りました。

親無し子を拾つて、これまで育てゝくれた大恩を思ふと、此上越後屋に踏み止つて、家族に迷惑をかけることは、血をわけない間柄だけに、彌三郎には忍びないことでした。

その上、まだあまり醜くならぬうちに、お絹とも別れて、美しい記憶だけでも殘さうといふのが、せめてもの彌三郎の望みだつたのでせう。

全國の靈場を巡つて、せめては後生を願はうといつた、悲しい決心を定めると、佐兵衞の引止めるのも、お絹の歎きも振り切つて、彌三郎は越後屋を飛出して了ひました。

それは三月ばかり前のこと、餞別に貰つた小判の百兩を懷中に深く祕め、編笠に面體を隱したまゝ、先づ日頃信心する觀音樣の近くに陣取つて心靜かにうろ覺えのお經を誦し乍ら、——せめては後世を——と悲しくも祈つて居るのでした。

業病を遺傳と思ひ込んだ當時の道德では、彌三郎の態度はまこに見上げたものだつたに相違ありません。

ところが、野天に寢て、不味い物を食ふやうになつてから、不思議に彌三郎の病氣は癒つて行きました。全く治つたわけではありませんが、次第に身も心も輕くなつて、年内に元の身體になるかも知れないと思ふ未練が、彌三郎を江戸から一歩も踏み出させなかつたのです。

お絹は人傳に彌三郎が觀音樣あたりに居ると聞くと、矢も楯もたまらず、横山町から毎日のやうに逢ひに來ました。

頑固な彌三郎は、部屋住のお絹が持つて來る金などは、どうしても受取らなかつたので、何時の間にやら、毎日變つた食物を持つて來て、彌三郎が編笠を傾けてそれを食ふのを、お絹は遠くから眺めて涙ぐんで居るやうになつたのです。

そのお絹の持つて來た壽司で彌三郎は殺されたのです。平次はこれだけの事を探ると、深々と手を拱いて考へ込みました。

## 六

平次は、兎に角横山町の越後屋に乘込んで行きました。今はおちぶれた彌三郎には相違ありませんが、自分の繩張り内に、人一人殺した下手人が、息を吐いて居ると思ふと、我慢がならなかつたのです。

「あツ、錢形の親分、よくお出で下さいました。丁度今弟と相談して、お願ひに上がらうといふところでした」

主人の佐兵衞はよく禿げた前額を叩くやうに、薄暗い奥から飛んで出ました。

「何か變つたことがありましたか」

平次も少し面喰らひます。

「三輪の萬七親分がいきなりやつて來て、彌三郎を毒害した覺えがあるだらう――つて、娘のお絹と甥の新助を縛つて行きました。そんな馬鹿なことがあるものですか」

佐兵衛はカンカンになつて平次にまで食つてかゝりさうです。

「親分、家出をして物貰ひにまで身を落して居るものを、何を物好きに殺す奴があるものでせう。兄が腹を立てるのも無理ぢや御座いません」

民五郎も口を添へました。若い時分は上方から九州までも放浪して、身に餘る野心を抱いたこともありますが、今ではすつかり落着いて、兄の莫大な身上を切り廻して、何から何まで指圖して居る四十男だつたのです。

「ヘエ――、驚きましたな。新助さんといふ人には逢つたことがありませんが、お嬢さんを縛るのは何うかして居ますよ、私が行つてよく話してやりませう」

と平次。

「何分宜しく願ひます。新助だつて、そんな無法なことをする人間ぢや御座いません」

佐兵衛にくれ〳〵〳〵も頼まれて、平次はぼんやり外に出ました。

「親分」

「何だ、ガラツ八か」

「三輪の親分が、あの綺麗な娘を縛つて行つたんだつてネ、罰の當つた野郎ぢやありませんか」

「何をつまらない」

「だつてさうぢやありませんか、自分が殺した覺えがあるものなら、翌る日も同じ時刻に、重詰の小風呂敷包なんか持つて、馬道まで行きアしません」

「――」

「それに、馬道から淺草橋御門まで行くうち、あの娘が後ろを振り返つて見たかつて親分が訊きなすつたが、あれは成程圖星だ、後ですつかり恐れ入つたぜ、――後ろ暗いところのある人間なら、後も振り向かずに歸るつてことはない。――ひよいと、これだけの事を考へるんだから、親分の腦は大したものだ」

ガラツ八は首を傾げたり、鼻の先を撫でたり、獨りで感心して居ります。

「それだけ判りや、手前も一本だ。八丁堀へ飛んで待つて、笹野の旦那にさう申上げて見るがよい、お嬢さんは其場で繩を解かれるから――」

「親分は？」

「俺は他に用事もあるから、もう一度此家の支配人に逢つてみる」

「有難てえ、あつしの口一つで許される段取になると、手もなくお嬢さんの恩人だね」

「まアさうだ」

「八五郎さん――と來たら何うしよう」

「馬鹿だね」

平次はさう言ひ乍らも、この剽輕な男、――ガラツ八の駈けて行く後姿を見て居りました。

話は飛びますが、平次が豫言した通り、八丁堀へ引いて行つて、奉行所のお白洲へ突出す迄の下調をされてゐたお絹は、ガラツ八の辯明で其日のうちに許され、佐兵衛を呼出して、横山町の自宅へ

歸しました。

「畜生、ガラツ八の野郎、つまらねえところへ出しや張る」

三輪の萬七とお神樂の清吉はプリプリして居りますが、與力の鑑識ですることへ、文句の付けやうもありません。

新助の方は止め置いて、二三日責めました。彌三郎さへ居なければ、お絹とめあはせられて、越後屋の跡取になることは、あまりにも明白な新助だつたのです。

お絹が彌三郎に未練があつて、毎日淺草へ出かけるのを、新助は知らない筈もなく、知つて嫉妬心を起さないとしたら、それは嘘になります。

「お絹さんが淺草とやらへ通ふのは、店中の評判ですから、私もよく存じて居ります。彌三郎が家出した後、私とお絹さんをめあはせるといふ下相談もあつた位ですから、私もお絹さんの出歩きを苦々しいとは思ひましたが、それ位のことで、人一人殺さうとは思ひません。第一私には、そんな恐ろしい毒藥を手に入れやうがありません」

口不調法なほど實直な新助は、これだけの事を何べんも何べんも繰り返して言ふだけで、それ以上に隱し事も駈引もあらうとは思へなかつたのです。

「旦那、見込違ひで御座いました。新助といふ男は、人を殺せるやうな性の人間では御座いません。あれは商賣外の事は白痴も同樣の男で御座います」

四日目に、三輪の萬七も到頭兜を脫いで了ひました。縛つて來た萬七が見込違ひと言ふのを、笹野新三郎、吟味與力でも、留めて置くほどの證據も自信も持つて居ません。

## 七

事件は其儘うやむやに葬られさうでした。三輪の萬七も間の惡さを我慢して、ちよい〳〵顏は出しますが、暫らくは手の下しやうもなく、平次はガラツ八に言ひ付けて、横山町一圓に泳がせましたが、名題の早耳も、大した面白い話を聞き込んだ樣子もありません。

「三輪の萬七親分は、お神樂の清吉をうんと働かせて、新助の身持と、越後屋へ入るまでの奉公先を洗つて居ますよ」

ガラツ八はそんな事を言つて來ました。

「フム」

平次の返事は一向張合がありません。

「厭が応でも、もう一度新助を縛る積りなんだね、——ところが、新助は生え抜きの米屋の手代だが、主人の弟の民五郎は、上方で藥種屋をやつて居たことがあるんださうですぜ」

「何だと？」

「藥種屋ならどんな毒藥でも手に入るでせう」

「誰がそんな事を言つた」

「番頭の茂助爺さんですよ。あの親爺は算盤の事しか知らないのかと思ふと、四十年も人の飯を食つただけに、なか〳〵氣の付くところがありますよ」

「フーム」

「親分が又腕を組んだ、この雙六も上がりが近いぜ。ね、お靜さん——おつと姐御、この秋は少し遠つ走りして、湯治にでも行かうぢやありませんか」

ガラツ八はさう言つて、晩の支度にいそ〳〵と立ち働くお靜の美しい後姿を見るのでした。

全く、このガラツ八の豫言も見事に當りました。

翌る日の朝、越後屋から急の迎へ。

「旦那が殺されて、新助どんが深傷を負はされました。すぐ親分に――」

と言ふ使の口上を半分も言はせず、平次は妻楊枝を叩き付けるやうに、ガラツ八を促して、横山町へ驅け付けました。

越後屋へ行つて見ると、全く文字通り上を下への騒動です。

「親分、た、大變なことになりました」

飛んで出たのは、少し狸に似た老番頭の茂助。

「飛んだ事だね、番頭さん」

平次は言ひ殘して奥へ入りました。

薄暗い佛壇の奥、獨り者の主人が晝でも時々は籠つて居る八疊の間には、床から抜け出したままの佐兵衛、血の海の中にこと切れて居ります。

傍には弟の民五郎、妙にウロウロして、何事も手の付かぬ様子で平次を迎へましたが、さすがに落着きを見せる積りか、血飛沫の中に、をの〳〵く膝を突いて、

「親分、御苦勞様で」

そんな事を言つて居ります。

平次は默つて會釋して、念入りに其邊を見廻しました。曲者は雨戸を外して入つたらしく、縁側には泥足の跡などを付けて居りますが、部屋の中には別にそんなものはなく、主人の佐兵衛は熟睡して居るところを、蟲のやうに刺されたらしく、少し乘出し加減に虚空を掴んで居りますが、深々と咽笛をゑぐつた傷の様子では、聲をも立てずに死んだ様子です。

「恐ろしい腕前だ」

平次は思はずガラツ八を振り返りました。寢て居る者の首が、半分千切れるほど斬るのは、非凡の業か腕力がなければなりません。

曲者の遺留品といふのは、蝋塗の脇差の鞘が一本だけ。

「この鞘に見覺えはありませんか」

誰へともなく平次が言ふと、

「ヘエ、そ、それは私の品で――中味は隣の部屋にあります」

待ち構へたやうに民五郎が言ひます。

次の間は深傷を負はされた新助が寢て居る、納戸兼用の六疊です。

一足入ると、此處は更に慘憺たる有様です。かなり取亂した中に床を敷いて、町内の外科が、新助の傷の手當をして居るところへ、

「災難だつたね、番頭さん」

平次は聲を掛けます。

「ヘエ――、私はよろしう御座いますが、旦那がお氣の毒で、何しろ晝の疲れですつかり寢込んで居るところをやられたんですから」

新助はおど〳〵した顔を擧げました。

「曲者の顔を見なかつたのかい」

「今申し上げた通り、何かに驚いて、ハツと飛起きると、行燈は消えて眞つ暗でせう、――旦那、旦那――と聲を掛けるといきなり後ろからバサリとやられたんで――」

「それから」

「恥かしいことですが、それつきり眼を廻して了ひました。呼び起されて見るとこの有様で、ヘエ――、何とも申譯御座いません」

「謝らなくたつていゝ、――ところで、その主人を呼んだ時隣の部屋に灯が點いて居たのかい」

「點いて居りました、ヘエ」

「疲れちや惡い、横になつた方がいゝだらう。全く災難だつたね」

平次は新助の後ろへ廻つて、外科の手當をして居る傷を見せて貰ひました。

右の肩下から、五寸ばかり定規で引いたやうに斬り下げた刀創は、さまで深いものではありませんが、血の出やうがひどいやうですから、隨分氣の弱い者は眼位は廻すでせう。新助は長年の米屋奉公で鍛へて、身體こそ立派ですが、人間は少し不愛想で、何となく臆病らしいところさへあります。

「これが曲者の捨てゝ行つた脇差かい」

「ヘエ」

平次は血刀を取上げて縁側へ出ました。朝の光りにすかして、切つ先から柄、目貫まで、丁寧に調べて居りましたが、何を考へたか、風呂敷を借りてそれを包むと、

「この脇差はちよいと借りて行くぜ」

さう言つて、今度は念入りに部屋の中を捜し始めました。

押入の中、箪笥の上、脱ぎ捨てた着物、一つも平次の目を脱れるものはありません。それが濟むと、縁側へ出て、便所の手水場の下をツクヅク眺めて居ります。曲者が何か洗つたものか、其處の植込や砂利に、ほんの少しですが、薄くなつた血が流れて居ります。

「親分、見當は？」

ガラツ八は心配さうに後ろから尾いて來ました。

「まるつきり解らないよ」

「ヘエ――」

「此家から人間を一人も出さないやうに手配してくれ。俺はちよいと出て來る。それから新助はなるべく一人でそつとして置く方がいゝぜ、手負は氣が立つちや惡い」

「何處へ行きなさるんで――」

ガラツ八は追つかけて訊きました。

「まだ飯も食はないぢやないか」

「あつしだつて食ひませんよ」

「我慢しな」

平次は風呂敷に包んだ脇差を小脇にフラリと外へ出ました。

## 八

其後へやつて來たのは三輪の萬七とお神樂の清吉でした。

平次がやつたと同じやうな探索をして、一度門口へ出ましたが、思ひ直したやうに取つて返すと、支配人の民五郎に繩を打つて引立てます。

「八五郎兄哥、念の爲に言つて置くがネ、これだけ證據の揃つた犯人を、平次親分がなぜ擧げなかつたんだ。後で繩張りが何うのかうのと言はないことだぜ」

萬七は冷たい言葉を浴びせると、ガラツ八を尻目に彌衆馬の群がる中を、腰繩を打つた民五郎を追つ立てゝ八丁堀へ引揚げるのでした。

吟味與力の笹野新三郎は、その時丁度平次と話し込んで居りました。

「萬七が越後屋の支配人を縛つて參りました」

取次がさう言ふと、

「何、萬七が？　――兎に角庭へ廻せ」

その聲を聞くと萬七は、待つてたと言はぬばかりの顏を緣側へ出しました。

「旦那樣、平次から御聞きで御座いませう。越後屋の主人を殺し、手代に深傷を負はせた、支配人民五郎を擧げて參りました。淺草で編笠乞食の彌三郎を毒害したのも、此奴の仕業で御座います」

「フーム」

笹野新三郎が顏を擧げると、庭へはもう、お神樂の清吉が、民五郎を引据ゑて居ります。

「兄哥、たうとう民五郎を擧げたね」

同じく緣側へ滑つた平次は、天を仰いで歎息するやうに斯う言ひました。

「それが惡いのか、錢形の、――彌三郎殺しを新助の仕業と思つたのは俺の鑑識違ひだつたが、今度ばかりは外れつこのねえ證據がある」

萬七は少しいきり立ちます。

「二人共、靜かにせぬか、――萬七、何よりその證據と言ふのを聞かうか」

笹野新三郎は二人の爭ひをなだめて斯う言ひます。

「申しますとも、第一に主人の佐兵衞と、養子分の新助を殺せば、あの身代は民五郎の自由になります。佐兵衞を斬つたのは、かなりの腕前ですが、民五郎は若い時ならず者の仲間に交つて、腕も少しは出來るつて言ひます。それから上方で藥屋をやつた事もあるさうですから、彌三郎を殺した恐ろしい毒藥を持つて居た筈です」

「――」

「それに、曲者は外から入つたやうに見せてありますが、緣側の泥足は、すぐその下の沓脫にあつた下駄でつけたもので、柔かい庭土の上には足跡もありません。曲者は内の者に決つて居ります」

――隨分ヘマな證據を拵へたんだネ――平次はさう言はうとして口を緘みました。萬七と爭つたところで仕樣がないと思つたのでせう。萬七は併し委細構はず續けました。

「新助は怪しいが、自分であれだけの傷を背中へつけられるわけはなく、番頭は年寄で荒つぽい事の出來る柄ではありません。もう一つ、動きの取れない證據は、主人と新助を斬つた脇差はこの民五郎のもので、中味は錢形のが持つて居る筈で御座います」

萬七の言葉には淀みもありませんでした。

「それは非道だ。私は人を殺すやうな人間ぢやありません。まして自分の兄を手にかけるなんて、聞いても恐ろしい――」

民五郎はあまりの事に轉倒して、縛られたまゝ身を揉みますが、繩尻を押へたお神樂の清吉は、グイグイと引いて大地に押付けて居ります。

## 九

「錢形の、民五郎が下手人でなきア、誰が殺したんだ。繩張は繩張、物の道理は物の道理だぜ――。わざ〳〵笹野の旦那をおつれして、見事俺に恥を掻かせる積りだらうが、そんなわけにゆくものか」

萬七はしきりといきり立つて居ります。

「そんな譯ぢやないよ、三輪の、口で言つても解らない事があつちや、人間一人の命にかゝはるから、旦那を始め皆んなの目で見て貰はうといふんだ」

平次はそれを宥め乍ら、横山町の越後屋の店から入つて行きました。人殺しの現場へ、吟味與力を引張り出すといふことは、なか〳〵容易ならぬことでもあつたのですが、新三郎は思ふ仔細があるのか、默つて平次について行きました。それを迎へたガラツ八は、不思議な事の成行に、大きな口を開いて挨拶をするのさへ忘れてをります。

慘憺たる中を一通り見て廻つた後で、平次は笹野新三郎と萬七を縁側に誘ひ出しました。

「この手水鉢の下の植込みと、白い砂利が血に洗はれて居ります。これは曲者が主人を斬つた後で脇差の刃を洗つたのでございます。脇差の柄の眞田紐が少し濡れて居りますから、間違ひは御座いません、――人を一人斬つて、二人目を斬る前に、刀を洗ふのは、並大抵の曲者にしては悠長過ぎはしませんでせうか」

平次は重大な謎を投げかけました。それを解けるのが、――いつぞや平次が女房のお靜に髭を剃らせて居るのを見た、ガラツ八だけかもわかりません。

「――それからこの柱を御覽下さい、かなりひどく血が附いて居りますが、これは手や着物から附いたのではなくて、傷口から飛沫いたのです」

「――」

「主人の死體からも新助からも、遠い、この柱の此方の側に血が飛沫く筈はありません。それに、新助は先刻、曲者に斬られた時主人の部屋の灯が見えて居た――と言つて居ました。此處で斬られて、後ろの灯が見える道理があるでせうか、新助は斬られて直ぐ目を廻して居るので御座います」

「それでは下手人は誰だ」

笹野新三郎、たまり兼ねて言ひました。

「お待ち下さいまし、此様にかう脇差の柄を縛つて――」

平次はさう言ひ乍ら、自分の持つて居る風呂敷を解き、中から血だらけな脇差を出して、その柄を風呂敷で柱に縛り付け乍ら續けました。

「斯う三尺五寸のところへ脇差を縛り、刃を下へ向けて、切つ先に肩先を當て、スーツと上へ起ち上がると、人間の身體が背後から斬り下げられたやうに眞つ直ぐに下へ傷が付きます。新助の背中の傷は、定規で引いたやうに眞直ぐに斬り下げてありますが、人間の手で斬つたんでは、あんなに行くものでは御座いません」

其處まで聞くと、半身を白布で卷いて、ウンウン唸つてゐた新助は、いきなり起上がつて這出さうとしました。

「八、その野郎を捕へろ。臥て居る人間の首を半分斬落した恐ろしい力だぞ、手負ひだと思つて油斷するな」

「何をツ」

猛烈な取つ組合ひが始まりました。

平次が手を貸さなかつたら、本當にガラツ八もどんな目に逢はされたか知れません。

「新助、まだ逃げるには早いぞ、もう少し聞かせることがある。この脇差の柄を縛つた前垂を何處へ隱した。先刻まで、少し血が付いて居るのに氣が付かずに、其處へ放つて置いたらう、――俺はそれ

を隠させる積りで此處を明けてやつたんだ。俺が脇差の柄に糠の付いてるのを眺めて居ると、手前は急に糠だらけの前掛を氣にして居たぢやないか」

「――」

新助はすつかり恐入ると急に背中の傷が痛み出したらしく、縛られたまゝ疊の上へ崩折れました。

三輪の萬七とお神樂の清吉は、何時の間に歸つたか、もう其邊には居ません。

× × ×

「恐れ入つたね、親分、三輪の萬七とお神樂の清吉がコソコソ逃げ出した恰好はなかつたぜ」

「馬鹿ツ、つまらねえことをいふな。俺は人を縛ると後の氣持がよくねえ、――だが、あの野郎は助けるわけに行かなかつたよ。尤も、あれほどの惡黨でも、主人の血の着いた脇差で自分を切る氣がなかつたのは不思議さ、餘つ程、氣味が惡つたんだね。それでたうとう露顯したのも因緣だらう」

平次はさう言ひ乍らガラツ八を促して家路に向ひました。

言ふ迄もなく新助は越後屋を乘取つて、お絹を手に入れる積りだつたのです。彌三郎を殺した毒藥は、民五郎が物好きで持つて居たのを、用箪笥から盜み出したもの、これはお白洲で判りました。

# 青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第十二巻　鬼女」同光社磯部書房
　　1953（昭和28）年8月25日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　　1933（昭和8）年11月号
※題名「銭形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2014年5月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控

## 血潮と糠

2026年10月1日　第二版

### 奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/